

〈研究ノート〉

## 道徳教育にできないこと，できること再考

菱刈 晃夫

キーワード：よい子，気づき，良心の覚醒，職務としての道徳教育，  
新学力観と学ばない主体性，オワコン化しつつある学校

はじめに

特別の教科としての道徳科が始動した。それまでの「道徳の時間」から「教科」と位置づけられることで、実践と評価も一体として行われることになった。

そもそも論に立ち帰るなら、週一回の道徳科の授業で児童や生徒の道徳性が著しく向上するとは考えられない。道徳とはモラルであり、その人の生き方・在り方の総体であるから。アリストテレスを引くまでもなく、それはエトスつまり習慣であり、その人が常に何かをなし得る情態を指す。道徳科の授業で、それが評価に繋がることを意識すれば、それなりに気の利いた発言ができる子どももいるだろうし、授業としてある価値判断を迫られるテーマが与えられれば、何が教師や親にとって何が「うける」答えであるかを察知してしまう子どももいるであろう。いわゆる「よい子」である。

しかし道徳科は、決して「よい子」づくりを目指してはならないはずである。というのも、モラルとは、その人の生き方・在り方の全体であり、教師や親が見ていないところで、いったいどのような振る舞いをするのか、しているのか、し得るのか、が重要だからである。それは児童・生徒に限らない。教師や親、いわゆる大人のたちにも当てはまる。が、振り返ってみれば現代に限らず、この世の中の全体が十分に道徳的であった時代は、未だかつて存在したことはない。この世では、子どもも大人も含めて人類全体が絶えず善と悪の混沌の中で苦悩するのであり、道徳的な世の中とは常に程遠い状態にある。現世は楽園ではない。苦界である。

要するに、道徳科の中で道徳の授業をしたところで、教師を含めて児童や生徒を(見せかけではない)道徳的な人間に変容させることはできない。つまり、道徳教育には人間を変える力はない。しかし、すべての教育がそうであるように、本人が自ら「変わる」きっかけにはなるかもしれない。変容の嚆矢、あるいは種まきはできるであろう。その程度の希望なら持てるかもしれない。

だが、あらゆることが学校教育というフォーマルな、常に評価が伴う意図的・作為的なシステムの中に組み込まれた時点で、そういった種まきがどれほど有効であるかは分からない。元来、すでに児童生徒は生まれ育ってしまっている環境から、否、すでに母親の胎内にいるときから私たちは、ある種の癖としての生きる習慣をインフォーマルに身につけてしまっているからである。それは、いわゆる頭や心の習慣であると共に、体の習慣でもある。

とはいうものの、制度としてある枠内で、学校教師は「できるだけ」の実践あるいは指導をしなければならない。それが職務であり、その代償として給料をもらっているからである。道徳科にそれほど期待することはない。だが、何もしないよりはしたほうがましと割り切り、職務としてできる範囲で指導に取り組もう。何も気負う必要はない。では、学習指導要領では何を学習指導しなさい、と記されているのか。以下に見てみたい。

### 1 節 学習指導要領から

例として、中学校をあげてみよう。

## 第1 目標

第1章総則の第1の2に示す道徳教育の目標に基づき、よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため、道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる。

## 第2 内容

学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の要である道徳科においては、以下に示す項目について扱う。

### A 主として自分自身に関すること

#### [自主, 自律, 自由と責任]

自律の精神を重んじ、自主的に考え、判断し、誠実に実行してその結果に責任をもつこと。

#### [節度, 節制]

望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け、安全で調和のある生活をする事。

#### [向上心, 個性の伸長]

自己を見つめ、自己の向上を図るとともに、個性を伸ばして充実した生き方を追求すること。

#### [希望と勇気, 克己と強い意志]

より高い目標を設定し、その達成を目指し、希望と勇気を持ち、困難や失敗を乗り越えて着実にやり遂げること。

#### [真理の探究, 創造]

真実を大切にし、真理を探究して新しいものを生み出そうと努めること。

### B 主として人との関わりに関すること

#### [思いやり, 感謝]

思いやりの心をもって人と接するとともに、家族などの支えや多くの人々の善意により日々の生活や現在の自分があることに感謝し、進んでそれに応え、人間愛の精神を深めること。

#### [礼儀]

礼儀の意義を理解し、時と場に応じた適切な言動をとること。

#### [友情, 信頼]

友情の尊さを理解して心から信頼できる友達をもち、互いに励まし合い、高め合うとともに、異性についての理解を深め、悩みや葛藤も経験しながら人間関係を深めていくこと。

#### [相互理解, 寛容]

自分の考えや意見を相手に伝えるとともに、それぞれの個性や立場を尊重し、いろいろなものの見方や考え方があることを理解し、寛容の心をもって謙虚に他に学び、自らを高めていくこと。

### C 主として集団や社会との関わりに関すること

#### [遵法精神, 公德心]

法やまじりの意義を理解し、それらを進んで守るとともに、そのよりよい在り方について考え、自他の権利を大切にし、義務を果たして、規律ある安定した社会の実現に努めること。

#### [公正, 公平, 社会正義]

正義と公正さを重んじ、誰に対しても公平に接し、差別や偏見のない社会の実現に努めること。

#### [社会参画, 公共の精神]

社会参画の意識と社会連帯の自覚を高め、公共の精神をもってよりよい社会の実現に努めること。

[勤労]

勤労の尊さや意義を理解し、将来の生き方について考えを深め、勤労を通じて社会に貢献すること。

[家族愛, 家庭生活の充実]

父母, 祖父母を敬愛し, 家族の一員としての自覚をもって充実した家庭生活を築くこと。

[よりよい学校生活, 集団生活の充実]

教師や学校の人々を敬愛し, 学級や学校の一員としての自覚をもち, 協力し合ってよりよい校風をつくるとともに, 様々な集団の意義や集団の中での自分の役割と責任を自覚して集団生活の充実に努めること。

[郷土の伝統と文化の尊重, 郷土を愛する態度]

郷土の伝統と文化を大切に, 社会に尽くした先人や高齢者に尊敬の念を深め, 地域社会の一員としての自覚をもって郷土を愛し, 進んで郷土の発展に努めること。

[我が国の伝統と文化の尊重, 国を愛する態度]

優れた伝統の継承と新しい文化の創造に貢献するとともに, 日本人としての自覚をもって国を愛し, 国家及び社会の形成者として, その発展に努めること。

[国際理解, 国際貢献]

世界の中の日本人としての自覚をもち, 他国を尊重し, 国際的視野に立って, 世界の平和と人類の発展に寄与すること。

D 主として生命や自然, 崇高なものとの関わりに関すること

[生命の尊さ]

生命の尊さについて, その連続性や有限性なども含めて理解し, かけがえのない生命を尊重すること。

[自然愛護]

自然の崇高さを知り, 自然環境を大切にすることの意義を理解し, 進んで自然の愛護に努めること。

[感動, 畏敬の念]

美しいものや気高いものに感動する心をもち, 人間の力を超えたものに対する畏敬の念を深めること。

[よりよく生きる喜び]

人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し, 人間として生きることに喜びを見いだすこと。

絶えず, 職務として無理なくできる範囲内で, を念頭に置きながら少し詳しく見てみよう。

①道徳科は, 「よりよく生きるための基盤となる道徳性を養うため」にある。モラルは人間社会で生きていくうえでの土台であり, そこに資する実践が道徳科である。仮に道徳性が全くない世の中を想像してみよう。動物界にもそれなりのモラルがあると言われていたが, しかし人間以外の生物は自然本能だけに従って生きていさえすればよい。人間のようにあまいで, 選択に迷うようなことはない。だが人間の場合は自然の一部でありながら, 自然を逸脱した生き物である。そこには選択の余地が残されている。その余白が多くあるところに, 個人的にも, 集団的にも, 国家的にも, さまざまな善・悪の線引きや価値づけが行われる。いわば自由であることの代償として, 私たちは善と悪の葛藤へと引きずり込まれることになった。そこに法が, そしてその基盤となる道徳性がなければ, 弱肉強食だけの人間界(hominis homini lupus)になってしまうであろう。もちろん現実には, この世間の実相は弱肉強食であることに変わりはないが, しかしそれでも現代ではいろいろな制度の下でマイルドに緩和されている。ともかく, 道徳性あるいは古代ギリシア・ローマ以来の人間性(παιδεία, humanitas)を抜きにして多くの人々が安心して生活することは不可能である。

②それを「道徳的諸価値についての理解を基に」行う。つまり, これをなくしては安心して人間生活がし

づらいと考えられる諸価値について理解しよう、ということ。これも人によってさまざまであり、人間の根本には我欲があるため、たとえ理解したところで、それを実際に常に実行に移すとは限らない。が、「価値」と呼ばれる、個々人の体質や性格にもよるところのものや多様性について、ともかく気づき、そして理解しようということである。

③では、どのように気づかせたり理解させたりするのか。「物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して」とあるように、「考えを深める学習」を通じて、つまり授業によって、である。週一度、人間生活(Life)にとって必要不可欠と「される」価値について、考える学習を試みようというのが道徳科である。

④そしてねらいは、「道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育てる」ことにある。判断力、心情、実践意欲とは、簡単に言えば人間の、頭、心、体に相当するだろう。むろんこれらは一体であるが、便宜的に頭で考えて、心で感じて、体で実行する、と言えば分かりやすい。ともかく「人間」として、「よりよい」生き方・在り方について、考え、感じて、行える児童生徒を育てよう、ということである。

しかも重要なのは内容の冒頭、「学校の教育活動全体を通じて行う道徳教育の要である道徳科において」である。つまり学校での教育活動の全体が「人間」教育そのものであり、そうした扇の要に道徳科が位置づくということ。実態は別にして、学校では日々、「よりよい人間」に向けての善意に満ちた学習および生徒指導が、教師一丸となって絶えず児童生徒に対して行われている、と言えよう。

## 2 節 どう学習指導するのか

道徳の教科化と共に、ついに道徳にも教科書が誕生した。学習指導要領は、A から D までの四つの視点から、それぞれについて「望ましい価値」とされる徳目をキーワードであげ、説明を付加している。もちろん先に触れたように、人によっては価値がない、とされるものも含まれるかもしれないが、学習指導要領であるからには、素晴らしく「よい」とされることが列挙されている。再びもし仮に、これらの道徳的価値が余すところなく実現された世の中があるとしたら、もはや法も不要となり、そこはパラダイスになるのだろうか。カントの言う、人間の道徳化が完成された世界とは、どういうものなのだろうか。実際には、それは幻想であり、そのことを学習指導要領の執筆者も承知してか、最後の徳目は、「よりよく生きる喜び」としてオプティミズム的人間観に基づき、こう締められている。「人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きること喜びを見いだすこと」。

ともかく週一回は授業時間があるわけだから、そこで道徳の学習指導をしなければならない。教材としては、まず教科書が用いられる。よく考えられた検定済みの教科書であるから、年間分の読み物としての教材が整然と配置されている。教師は学校ごとに計画されている年間および学年の指導計画に従って、道徳の教科書をきちんと、職務としてこなしていけばよいだけである。繰り返すが、何も気負う必要はない。教科書そのものにもさまざまな工夫がされていて、良し悪しは別にして教師用の指導書もあり、さらに付属のワークシートなど、それぞれの教科書の目ぼしい読み物資料に準拠したレシピ本は、巻にもネット上にも溢れている。また指導法に特化した道徳関連の学会や勉強会グループのようなものも複数ある。道徳教育に特別な関心を持つ教師なら、こうした集まりに参加して知見を深めるのものよい。ただ授業の基本形となる型だけは知っておいたほうがよい。すでに詳細は拙著で既述したので、ポイントのみ簡単に確認しておこう。

だいたい道徳科の教材としての教科書は読み物資料であり、いわゆる道徳的な「気づき」や考えるための「きっかけ」、つまり仕掛けが仕組まれたストーリーが多い。小学校低学年の場合は動物も多いが、登場人物がいて、ある出来事があり、そこで主人公となる自分の内面すなわち心に焦点が合わされる。何らかの出来事の中で、主人公の心に中に、ある葛藤や動揺が生じる。問題は、読者たる児童生徒にも、できれば作者や教師の意図どおり、主人公の内面に生じたのと同様の葛藤や動揺を追体験させ、それについ

て深く考えたり他者と議論したりして、すなわち「道徳的諸価値についての理解を基に、自己を見つめ、物事を広い視野から多面的・多角的に考え、人間としての生き方についての考えを深める学習を通して、道徳的な判断力、心情、実践意欲と態度を育て」たい。ねらいを頭に置くか、心に置くか、体に置くか、は教師の指導案次第である。もっとも重要なのは、いかにして児童生徒に、まずはたっぷりと追体験させるか、である。学習指導要領でも「指導計画の作成と内容の取扱い」の中で教材については、「人間尊重の精神にかなうものであって、悩みや葛藤等の心の揺れ、人間関係の理解等の課題も含め、生徒が深く考えることができ、人間としてよりよく生きる喜びや勇気を与えられるものであること」とされている。

そこで①教師は、教材としての教科書をよく読んで全体のストーリーと構造をしっかり把握しなければならない。②主人公は誰で、何をきっかけにして内面に変化の兆しが生じるのか、その位置を見極めなければならない。③結果として、どうなった、あるいはこの先どうなるのか、児童生徒に深く考えさせるとともに、前向きな生き方へと鼓舞しなければならない。いずれにせよ教師からすれば使役形で児童生徒自身に、自分の心を振り返らせ見つけさせることが指導の中心にある。そのためのあの手この手の工夫が学習指導案であったり、教育方法であったり、数多くのレシピ本等となって、求める者には入手可能というわけである。しかし言うまでもなく、あくまでも教師自身が、まず教材をよく読んで味わい、その内容を自分事として追体験しておかなければ、他人である児童生徒を指導することはできない。道徳科は何よりも教師自身の生き方・在り方としてのモラルを問うものである。ただし、それはかなりシビアな課題でもあって、とりあえずは職務として、道徳の授業をこなさなくてはならない。例として、中学校道徳の読み物資料として定番の「銀色のシャープペンシル」を見てみよう。この教材の学習指導案も数多い。ここでは広岡編著のものを参考にする。

①主題名は「よりよく生きる喜び」。

②ねらいは、「拾ったシャープペンシルを返しそびれて葛藤する主人公の心情を〔追体験することを〕通して、人間には自らの弱さや醜さを克服する強さや気高く生きようとする心があることを理解し、人間として生きることに喜びを見いだそうする道徳的実践意欲を育む」となる。

ストーリーには、登場人物によるさまざまなセリフがあるが、一番の問題は主人公の心の内面であり、そこに聞こえてくる良心の声である。結論から言えば、私たち人間すべてに元より備わっていると信じた良心の覚醒が、この物語のテーマである。

主人公である「ぼく」は一人称としてあらわされている。この「ぼく」に読者たる生徒が感情移入しなければならない。いかに効果的に感情移入させるかが教師の課題である。まず、ぼくは掃除の時間の際に銀色のシャープペンシルを拾い、それを自分のものとしてしまう。この行為からすべてが始まる。理科の授業の際に、それはぼくのシャープペンシルでは、と卓也から尋ねられる。そのとき主人公は、これが拾ったシャープペンシルであり、卓也のものであることに気づいた。ところが健二から「お前、とったのか」と言われ、周りの目も気になり、拾ったシャープペンシルをそのまま使っている、とは正直に言えなかった。これではクラス全員の前で泥棒とされしまう。とっさに、「自分で買った」と嘘をついてしまう。大事なのは、ここからである。ぼくの心の葛藤や動揺が続くからである。健二はにやにやしている。卓也は黙って下を向いている。心の葛藤が詳しく描かれる。そこに何も自分は悪いことなどしていない、といった自己正当化や合理化もあらわれる。しかし、シャープペンシルを握る手はじんわり汗をかいている。体は正直だ。

そこで、「ぼくはシャープペンをポケットにさっとしまうと、みんなにわからないように汗をズボンで拭いた」とある。そこで、なぜ「みんなにわからないように」なのか、あるいはそのときどのような気持ちだったのか、あるいは何を考えていたのか、と問いかけてもよい。さらに、「授業が終わると、ぼくは二人の前を素通りし、一人で教室にもどった。だれともしゃべる気にはなれなかった」のはなぜだろう、あるいはこのときどのような気持ちだったのだろうか、あるいは何を考えていたのだろうか、と問いかけてもよい。その後、ぼくは次の行動にでる。そっと卓也のロッカーに戻すのだ。すると後日、卓也から自分の勘違いで疑ってごめんなさい、と電話がある。もともと葛藤を抱えていたぼくには、さらに動揺が広がる。嘘をついた

のは自分なのに。突然、「ずるいぞ」という声が聞こえた。まさに良心の声である。何がずるいのか、と問うてみよう。さらにずるいには、続きがある。また葛藤。このあたりの葛藤のプロセスに生徒が感情移入して追体験できるかどうか。させられるかどうか。最後に、夜空に浮かぶ星座を眺めて、ほくは深呼吸し、卓也の家に向かうところで話は終わる。このときほくは何を思っていたのか。

「ずるいぞ」というほくを責める声は、紛れもなく良心の声である。この声をきっかけにしてほくの内面は変容していく。最終的に、思い切り深呼吸した後に、最後の行動にでる。ここに至るまでのほくの心の内面について、生徒が自分事として考えを深められるかどうか、いかにして考えを深めさせるのか。ここに教師の指導法の工夫が求められている。

このように各教材には「自己を見つめる」ための仕掛けが構造的に仕込まれている。そのポイントをつかんだうえで、中心発問を一つ定め、ねらいに向けての授業を展開するように試みるわけである。このストーリーの場合には、やはり最後に星座を見上げながら何を思ったのか、あたりに重点が置かれるかもしれないが、最終的には教師の判断による。教科書にも指導書にも、それなりの方法が記されているので、まずは参考として取り入れ、そのまま授業に活用してもよい。

いずれにせよ大切なのは、教材や授業をきっかけとして、児童生徒がねらいにある道徳的価値に気づいてくれるかどうか、である。職務として道徳の授業をしなければならない教師ができることは、あくまでもそのための努力であり、児童生徒が本当に気づいてくれて、望ましい善き方向へと内的に変容するかどうかは他人である教師が知る由もなく、その真相は不明としか言いようがない。教師は職務として、できることの範囲内で、常識的にできることをするしかない。後は自業自得、児童生徒自のおのの人生なのだから。

## おわりに

あらためて道徳教育にできることは極めて限られていることが分かるだろう。人が人を変えることはできない。ましてや人の心や内面を変えることはできない。変わるのを促したり助けたりできるのみであり、究極的に自分も含めて人間の心は自ずと変わる他ない。自分に拠らない何かによって変えられるとでも言えようか。

しかし、むしろ普段の道徳教育で求められるのは、もっと簡単なものでよいのかもしれない。それは、ルール感覚といったものだろう。これは我欲の塊である人間が共存していくために必要であり、自己の欲望や情念のコントロールにとって不可欠であると言えよう。人間の内面には他人が完全に関与し得るものではなく、またしてはならないが、世の中には各自が固有の内面世界を持った多様な個人がいて、そうした人々ができるだけ共存していけるためには、決まりや規則、総じてルールが欠かせないし、これを蔑ろにしてはならないという、最終的には法意識に繋がる感性でもある。

あるいは規範や型と言ってもよいかもしれない。人間の内面は変えられないが、外面、すなわち外的な行動は外部から規制することができる。他人である教師や親ができるのは、ここまでである。そして、外相整って内相自ずから熟す、である。行動を整えれば、心も自然に整う。まずは目に見える形の指導が、道徳教育においては重要である。

むしろ些末なルールのためのルールもあり、ルールはしかるべき手続きを経て変更可能であることも教えなくてはならない。が、ともかく特に義務教育段階の道徳教育において必要とされるのは、児童生徒の内面を変容させようとするような身の丈に合わない、それこそ偽善的な見かけ美しい道徳教育ではなく、あくまでも現実的なルールの徹底や、これについての思考ぐらいで十分にも思える。というのも、この基礎・基本すら今日ではぐらついていて、カリキュラム全般にも言えることでもあるが、理想主義的な肥大化の末、とても一人の生身の教師には実現不可能な内容が盛りだくさんに組み込まれてすぎていると思われるからである。また授業以外の余計な仕事（たとえば部活など）も多すぎる。これでは教職がブラックと言われている

も仕方がない。まずカリキュラムを立案する人々にも現場の惨状を身に染みて体験してもらうために、教育実習を必須にしたらどうであろうか。自分ができないことを他人にさせようとするのは、それこそ道徳的に問題である。

以上、気負うことなく淡々と、職務として道徳科の授業を無理なくこなすために覚えておくべきことを、思いつくままに記してみた。究極的には人は皆、偽善者であり、できることには限りがある。教職志望者は、まず自分自身の心身の健康に十分配慮のうえ、各自で無理せず、できないこととできることを区別しながら探究を継続されたい。

なお働き方改革を真に実行するつもりなら、まずはカリキュラムを精選してスリム化し、仕事の総量自体を削減すると共に、職務の分配と分業化が求められる。あわせて道徳教育も、抽象的で内的な心を扱おうとするのではなく、もっと具体的かつ現実的な外的行動の規則や作法を重視するほうが、はるかに世のため人のため、身の丈にも合っているように思われる。

### 補遺(エッセイ) オワコン化しつつある学校にできないこと、できること

あえて蛇足を重ねよう。Teaching から Learning へ。「自ら学び、考える力」を育むとされる新学力観、つまり「生きる力」などと言われるようになってから、自ら学びも考えもしない子どもや学生が多くなってきているように感じる。日常では、近年よくしゃべりはするが、よく考えていない学生が多くなったとか、指示待ち状態だとか、多くの教員たちは口をそろえて言う。だがプレゼンだけは適当にやっつけてのけるハタタリは得意だ。それもそうである。「主体性の尊重」は、「学ばない主体性」も尊重するから。教育の、特に「教える」という、まず半ば強制的なインプレス(impress)があって初めて、まともなエクスプレス(express)が成り立つというもの。内容があつての表現である。真偽不明でステレオタイプの情報の入手と切り売りは、デジタルネイティブ世代にとっては、お手の物である。しかし、「主体的に」「深く」は考えていない。むしろ「対話的」でもない。リテラシーも低い(文章が読めないとか集中力がない)。もちろん学生による個人差は激しい。学び考える前提にあるモチベーションも、ない者、少しはある者など、その差も大きい。

すでに拙著でも繰り返し述べているが、いわゆる新学力観に基づいた教育方法を実現するには、それなりの既存の学力——多くは詰込みによる——が前提されていることが必須となる。すでに大正自由教育の時代、木下竹次が『学習原論』で100年以上前に記しているように、学習を成立させるためには、まず「身体的」「精神的」「道徳的」基礎が必要とされるのだ。ごく簡単に言うと、学習に向かう際の、教室での体の姿勢、頭の知識、心の態度、すなわち知(あたま)・徳(こころ)・体(からだ)の三位一体である。今では、そうした基礎を全く無視して、いきなり「さあ、学びましょう」と始める。完全に間違っているし、準備も基礎もない、そもそも学習集団としての学級が成立していない、いわゆる学級崩壊の中——彼らは確かにアクティブではあり何かをラーニングしているのかもしれないが——で始めても効果は見込めないであろう。授業が成立し得ない状態だ。労多くして功少なし。

しかも、便利な世の中になり、とにかくカネさえあれば楽に生きられる——正しくはあるがそれがすべてではない——ような時代に、だいたい「自ら学び、考える」必要などないのだ。世の中は便利なサービスやビジネスの名の下で、ますます人が「自ら学び、考える」自由意志を奪い、マーケットの寡占と人々の隷属化、換言すれば自己家畜化を進めている。子どもも大人も、教員も、その中にどっぷり漬かっている。こうした中で人々の価値観は、市場経済の手中で、多様化を装いつつむしろ一元化している。否、上からの命令やしごらみ等々に縛られて「主体性」にもっとも欠けるのは、無理難題だらけの学習指導要領を法令として形式的に強いられ(あるいは仰いで)思考停止した、多くの教員自身かもしれない。ドウブツとしての子どもは、それこそ動物的にまだ主体的(我意的)である。しかしそうした子どもも、いずれ学校教育を通じて大人と共に自己家畜化していくであろう。池田清彦も言うように、自己家畜化に貢献するのが日本の公教育であり、また本来これが道徳教育も含めて主要な仕事でもある。ヒトである子どもが生ま

れつき動物として持っている「獣性」を、規律と訓練によって、その時代や社会に適う「人間」へと、たとえ形式的にでも仕立て上げる「馴致」装置が近代学校であり、公教育の主要な役目であり、それは現在でも重要な仕事である。それでも自己本位的でモラルの欠如した、自分さえよければいい、歩きながらでも所かまわず平気でスマホのような、エゴイスティックな人々は増え続ける。

さらに追い打ちをかけるのは、そうした四六時中スマホ等の感覚的な刺激に接して、現代人の多くの脳（特に前頭葉）は劣化も著しいこと。思考力も集中力もダウンしている。私たちを取り囲むのは、ここにあるフェイクも含めた「正解」であるかのような、感覚的かつビジュアルな危うい「情報」環境である。これも自己家畜化と洗脳、つまり多様な価値観を装う価値の一元化のための強力なツールとなる。インスタ等のSNSにより、ますます人々は他人の動向を気にするようになり、承認欲求に駆られる。それは他者による、出鱈目な「いいね」によって得られる、あやふやな当てにならない自己確認であるから、確実でもなく永続もしない、刹那的で瞬間的な自己満足にすぎない。そこで自我は、よりいっそう他者に依存するようになり、自己はさらに不安定となる。そしてさらに、そうした自己不安から逃れたいがために、いっそうSNSやネットゲームを含めた、その他の怪しい「宗教」や薬物も含めた依存症へと引きずり込まれる。しかも、それもまたカネのかかるビジネスとして成立している。

が、そもそも論に還れば、西村茂樹が道徳教育に関する講演の中で明治初頭すでに指摘しているように、多くの日本人には、長い封建的な江戸時代を経て欧米的な主体性や個人など、もともと備わっていない。つまり、おとなしく家畜化されているのだ。今でも集団同調的であり、主体性や個性とは真逆のハビトゥスの再生産を学校が果たしているわけであるから、そうした学校教育が主体性や個性を掲げて、ましてや個別最適などと、さらに無理なことに追い打ちをかけるような施策をしていては、その難題に素手で取り組むことを余儀なくされる多くの教員たちが悲鳴をあげるのは、至極当然である。教員の成り手にも事欠くのも当たり前だ。母性社会的な世間に生きる日本人の人々に、西洋的な個性や主体性を求めること自体の矛盾を、わが身を含めた日本人のメンタリティーに照らしてみても、よく再考してみたらよい。常に同僚や上司の顔色を窺い、空気を読んで、という忖度の風土が心地よい人々は、とりわけ教員の中に、今でも大勢いるのではないか。おそらく企業ならば淘汰されるしかない慣習は、学校教員等を含めた公務員的な体質のままの機関では、「会社」が潰れることはないため、根強く温存されることになる。ここに世に言う教員の非常識、長時間労働こそマジメで当たり前のようなカルチャー、時代遅れがまかり通るようになる。

ところで、かつてドイツではルターによる宗教改革がリテラシーを高めて国民全体の教育改革にも繋がったが、現代はまるでそれ以前の、文盲の中世に逆戻りしたかのようである。だが、権力を握る教会や国家にとっては、このほうが好都合かもしれない。じつは「生きる力」に基づく学習指導要領が意図的に、あるいは図らずも無意図的に目指しているのは、多くの人々の「中世化」、つまり思考停止なのかもしれない。リテラシーを保つ層は、いつもそれなりにいるからである。これが何を意味するかは言う必要もなからう。巨大なマーケットで儲ける人々。教育と経済、そして政治は結託している。支配する者は少数でよく、資本主義が行き着く先は、やはり資本主義的な専制性である。世の中とは、常にそうなのだ。民主主義は、幻想である。その発祥とされる古代ギリシアの歴史を見れば、分かることだ。

ともかく、自ら学び、考えるのは、他の動物と同様、人が本当に生物として「生きる」のに「困った」ときだけである。それ以外は、なるべく考えたくないし、楽をしたいものだ。それが動物としてのニンゲンの本性である。幸か不幸か、かつての飢えや貧困など、人生に本当に「困る」必要もあまりない時代に、学校教育の中だけで「生きる力」や学習指導要領をありがたく唱えているだけの日本では、まともに勉強しない、できない、そうした習慣を持たない子どもたちは、ますます貧困化し、そうではない階層の人々は、今まで通りの学力や成績を進学塾等の力を借りて、さらに伸ばすことになる。その経済的な格差は見ての通りである。いわゆる新自由主義は貧富の差を際立たせた。この点を、まず押さえておかなければならない。

もはや、とりわけ多くの公立学校は医療で言うと、いわば保険適用内の最低限のサービス提供機関となりつつある。そこに多くを期待することは、そもそもお門違いなのかもしれない。よりきめ細かい高級なサー

ビスを期待するなら、カネはかかるが（自由診療の）それなりの私学を選択したらよい。かつては、義務教育などその程度のもと思われていた時代——たかが学校されど学校——もあり、また今よりも規律は厳しかったが、しかし、あとは自由勝手であった。現代は、すべてを事細かに管理しようとして、窮屈な世の中である。（そのくせ、学級崩壊は普通にあふれかえている。）総合的な学習だの探究だの、あるいは自己調整学習だの、教育史を顧みれば大昔から知られていたことを、さも横文字をカタカナにしたら真新しいことのように見せかけ、多くは英語からの翻訳物を出汁にして言うけれども、それすらあくまでも教員の手によって設定された枠組みの中での活動に終始しがちである。子どもたちは結局、これが「正解」ですか、と教員に問いかけ、手っ取り早くネット検索や生成 AI に尋ねたりするのがオチとなる。コスパとタイパを重視する世代。むろん、そうした「学び」に形式上つきあってくれる子どもはいるであろうし、そうしたふりはするであろう。が、すでに塾で学習済みだったりする。「学び」まで教師にコントロールされようとしては、息苦しくてたまらない。どのような学び方をするかは、各自の気まま勝手である。（いろいろ理屈は並べ立てるけれども、じつは巧妙に誘導され強制された「学び」が、本当に自発的な「学習」と言えるのだろうか。それなら堂々と初めから「教授」したらよいのではないか。）スイミングやピアノなど、習い事も多く、子どものときから超多忙なのだ。忙しい中で、「自ら学び、考える」余裕など、ない。それは教員にも当てはまる。にもかかわらず、あの盛りだくさんな学習指導要領。ここまでくると、もう滑稽としか言いようがない。

ともかく、今これから何をまずは、すべての子どもたちにインプレッションしなければならぬのか、授業時間数の精選を含めたミニマム・エッセンシャルズ（必要最小限）のカリキュラムを、「学ぶ」ではなく「教える」を中心として、真剣に考え直すべきなのではなからうか。決して「学び」を否定してはならない。ただ、安易な「学び」中心主義の欺瞞や弊害についての自覚が必要なことだけは言っておきたい。

果たして次期の学習指導要領は、どうなるのだろうか。いくら学習指導要領が立派でも、それを実現する教師がいなければ、どうにもならない。いわば譜面だけは立派であるが、演奏するプレーヤーがいなければ、できないような楽譜では意味がないのである。

年を追って肥大化する一方のカリキュラムを、いわば「学び」のアレンジ——カリキュラム・マネジメントなど意味不明の横文字カタカナ、日本語にすれば要するに「教育課程（授業）のやりくり」——によって「詰め込まず」して「詰め込め」と言っているかのような矛盾した教育政策は、もはや終わっている。だいたい近代学校システムそのものが、いわばオワコンと化しつつある。その証拠として土台、「やりくり」（マネジメント）の限界を突破して不可能なことをやらされるブラックな教職の志望者は激減しているし、うつ病など精神疾患で休職・退職する教員も増え続けている。現代の小中学校の多くは、まさにブラックそのものである。こうしたニュースに対して、次のようなコメントが印象に残る。そのまま引用しよう。肝心の授業以外にも膨大な雑務的業務に追われる今の公立学校。「客を選べない底辺飲食業状態ですからね、今の公立校教職員は。自分のほうが偉いと思ひ込んで親たちやクソガキの相手を毎日10時間やってみなさい。誰だって壊れる」。まさに、その通り。これに対する文科省の回答は、いつものように役所対症で終わり。採用試験の時期や給料といった些末な問題が原因ではない。教員には強靱な精神力と、まずは体力が必要とされる。タフでなければ勤まらない。わが身は自分で守るしかない。

ところが、たとえオワコンであるにしても、悲しいかな、それを代替するものがない。そこで今は、対処療法的にその場しのぎで苦しむ他はない。よく問われるが、子どもが好きとか可愛いとかいう情緒的な志向性は、公教育に携わる者の必要条件ではない。教員の質が著しく低下する中で、現に、そうした者たちの性愛的な犯罪が毎日のように報道されているではないか。むしろ情緒はほどほどにしてクールにザッハリヒ（即物的）に教育に携わるほうがよい場合も多い。すべての人々にカウンセリングマインドを求めるのは馬鹿げている。

畢竟、本当に自ら「困る」ことがなければ、人は何も「自ら学び、考える」ことはない。それだけは、確かである。しかし、それはとても苦しく辛いことだ。だから、言われた通りやっている方が楽なのである。

多くの人々は家庭や学校教育による自己家畜化を通じて、世間という檻の中に、自ら好んで喜んで入ることを望む。ここで主体性や個性の大部分は、邪魔者扱いされるようになる。うまく檻の中に入れない——入った「ふり」のできない——者は、いじめられる。そしてずる賢い者は、自己家畜化された「ふり」をして、結局のところ好き勝手なことをするようになる。それが日本という、良くも悪くも前近代的な世の中の正体である。が、そうした自己家畜化に体質的に馴染めない人間もいなければ、この国の未来は、ますます暗いものになるであろう。すると、教員の言うことをきかない子どもや生徒に学生、世に不登校児童や生徒が増えているというのは、むしろ歓迎すべき事態なのか。彼らをいわゆる「世間知らず」と片づけるわけにもいくまい。今後の課題としたい。

P.S. 皮肉にも現代もっとも「自ら学び、考える力」を持っているのはAIなどのマシンである。「スマートフォン、賢くなるのは、機械だけ」(『スマホが学力を破壊する』より)。ふつう一般の人々の奴隷化は加速する。すべて自動で、何も自ら考えもせず、自由で快適なライフ?! 挙句の果てAIに人間が脅かされるとき、やっとまた「自ら学び考える」人が少しはいるのかもしれないが、もう手遅れかもしれない。

#### 主な参考文献

木下竹次『学習原論』日黒書店、1923年。

西村茂樹『日本道徳論』岩波文庫、1935年。

河合隼雄『母性社会日本の病理』講談社+α文庫、1997年。

三好行雄編『漱石文明論集』岩波文庫、1986年。

菅野仁『教育幻想——クールティーチャー宣言——』ちくまプリマー新書、2010年。

アリストテレス『ニコマコス倫理学(上・下)』渡辺邦夫・立花幸司訳、光文社古典新訳文庫、2015/2016年。

ピースタ『教えることの再発見』上野正道訳、東京大学出版会、2018年。

川島隆太『スマホが学力を破壊する』集英社新書、2018年。

広岡義之・牧崎幸夫・杉中康平編『楽しく豊かな道徳科の授業をつくる2』ミネルヴァ書房、2019年。

ハンセン『スマホ脳』新潮新書、2020年。

拙著『教育にできないこと、できること——基礎・実践・探究——[第5版]』成文堂、2022年。

榎浩平『スマホはどこまで脳を壊すか』朝日新書、2023年。

池田清彦『自己家畜化する日本人』祥伝社、2023年。

文部科学省『中学校学習指導要領解説 特別の教科道徳編(平成29年7月)』[https://www.mext.go.jp/content/220221-mxt\\_kyoiku02-100002180\\_004.pdf](https://www.mext.go.jp/content/220221-mxt_kyoiku02-100002180_004.pdf) (2024年7月28日閲覧)

ANNnewsCH「精神疾患で休職の教員 最多7000人【知っておきたい!】【グッド!モーニング】(2024年12月21日)」  
[https://youtu.be/gf1JOJYO518?si=Y1BzE5KSAPUikm\\_J](https://youtu.be/gf1JOJYO518?si=Y1BzE5KSAPUikm_J) (2024年12月22日閲覧)